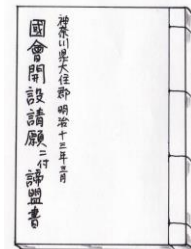


ひらつか歴史ばなし その十

国会をつくる 広がる署名運動

— 明治時代 —



「外国と対等な日本になるには、国民が選んだ代表者たちでつくる国会が必要なんだ」

「そうだ、そのことは明治の初めに天皇陛下が、すべてのことは公論（人々の意見）で決めると言われているじゃないか」

明治十三年（一八八〇）二月、府知事と県令（今の県知事）を集めた地方官会議が東京で開かれました。それを傍聴するために全国から多くの府県会議員が集まり、会議の

あと、有志ゆうしで懇親会が開かれました。そこで話題になったのが国会かいせつの開設です。

神奈川県からは一三人の県会議員けんぎが上京じやうきやうします。その中に、馬入村まにりむらの杉山泰助すぎやまたいすけ、小嶺村みね（現豊田小嶺）の福井直吉ふくいなおきちもいました。杉山家は、薬などを扱う商売をしていて、泰助は、緒方洪庵おがたこうあんが開いた大阪の適塾てきじゆくで蘭学らんがくを学んだといひます。このとき三十八歳。福井家は代々名主なぬしを務めてきた大きな農家で、直吉は、宮崎拈堂みやざきかくどうが開いた成器塾せいきじゆく（現上平塚に所在）で漢学を学びました。このとき三十二歳。

このころ、全国で国民の自由や政治参加への権利を求める声が高まっています。明治七年（一八七四）、板垣退助いたがたいすけたちが、政府に国会開設の要求を出したことによって始まったこの運動は自由民権運動じゆうみんけんと呼ばれます。

「問題は、国会を開くことをどうやって、今の政府に認めさせるかだ」

「うちの県では、すでに請願書せいがんしょをつくったぞ」



「私たちのところでは、いま署名しよめいをあつめているところだ」

集まった人たちの話を聞いていた杉山と福井は、顔を見合わせました。

「これはうかうかしてられないぞ、神奈川県でも運動をはじめなければ」

「もどいたら、どうやって署名を集めるかみんなと相談しよう」

さっそく、杉山と福井たちは、地元の有力者や仲間たちに話をしました。

「たしかに国会は必要だ。われわれの声を政治に

反映させるためにも」

「手分けをして署名を集めよう」

そうして大住・淘綾郡（現平塚市、伊勢原市、秦野市、大磯町、二宮町）では、二八九九人の署名を集めました。

四月になって、県内の各地域の代表や有志が、江ノ島えのしまで会合を開き、これに福井も出席しました。

「この署名を政府に提出するにあたって、その理由をしっかりと書かなければならないだろう」

「福沢先生にお願いしてみてもはどうだろうか」

福沢先生というのは、福沢諭吉（一八三五～一九〇一）のことです。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」で有名な『学問のすゝめ』を書いた人で、慶応義塾けいおうぎじゅくの創

設者でもありません。

「国会は、これからの日本になくなくてはならないものです。私でよければ引き受けましょう」
福沢は、そう返事をしました。

福沢が書いた国会開設建言書けんげんしょと署名は、六月に元老院げんろういん（当時の立法機関）へ提出されました。

それから一年四か月後の明治十四年（一八八一）十月、政府は国会を開設することを約束しました。九年後の明治二十三年（一八九〇）です。

その後、福井直吉は、明治二十五年（一八九二）の第二回総選挙で当選して国会議員になり、自分の意見を国政で述べる機会を得たのでした。